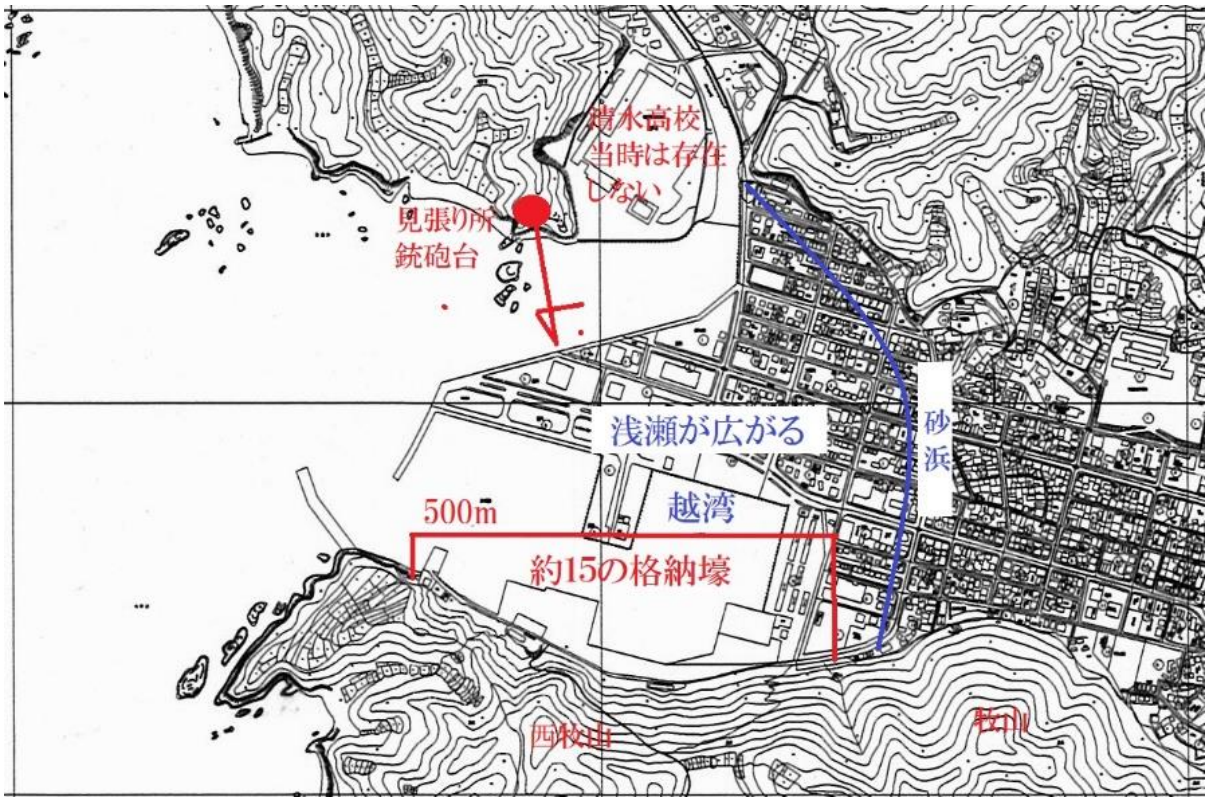
=市史編さん便り=　【45 号】 令和 3 年 10 月 25 日（月）発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

第 21 突撃隊・第 132 震洋隊（土佐清水）基地の特攻艇格納壕跡（3）

(1)第 132 震洋隊（土佐清水）基地の食糧は？

基地ができた当初、主食・副食・調味料等は 3 か月の備蓄があった。その後、逐次備蓄され、終戦時はほぼ 6 か月の食糧が備えられた。戦時中はあくまでも軍事優先。民間では考えられない備蓄があった。しかし、個々の隊員への分配は決して腹を満たすほどのものではなかった。震洋搭乗員である特攻兵の平均年齢は 17 歳あまりである。まだ、育ち盛り、食べ盛りの年頃であった。若い搭乗員が宿舎から下りてきて付近の民家に度々芋をもらいに来ていた。

土佐清水市郷土史同好会の故・久松治幸氏によると、小江町にあった実家に若い兵隊さんがよく芋を欲しがってもらいに訪ねてきた。そこで久松さんのお母さんが「お腹を空かしているのだろうと思い、機嫌よく芋をあげた」ということを戦後に久松さんによく話していたという。



※土佐清水市まちづくり対策課作製 2500 分の 1 地形図をトリミングし、加筆した。

(2)第 132 震洋隊(土佐清水)基地の兵士と地域住民との交流

娯楽のない戦時下の基地生活、震洋搭乗員の若い特攻兵たちは、厳しい軍律の枠内で生活しながら、地域の人々と交流し、知り合いとなって休日は民家に遊びに行くこともあったようだ。彼らは、ある面で地域の人々に認められ、尊敬の念で迎え入れられていた。それが証拠に兵たちの中には戦後、慰霊祭が土佐清水でおこなわれるごとに遠方から出席し、地域の人々と交流を重ねている人が複数存在していたのである。元特攻兵・村田金蔵氏(埼玉県伊奈町)は、戦後 2 回にわたり土佐清水を訪問し、地域の方々より、「前もって連絡いただければ、もっと盛大に歓迎会を催すことができましたのに」という温かい言葉をかけてもらっている。

(3)まとめ

戦後、76 年。この第 132 震洋隊(土佐清水)基地の記憶も風化し、忘れ去られようとしている。計算上は 80 歳後半以上の人ではない限り、震洋艇が壕の中に格納されていた光景を見ている人がいないからだ。まさに、ここが時間との戦いたるゆえんである。今回の新市史編さんにあたって、第 9 章戦争遺跡を担当する出原恵三編集委員は、震洋特攻艇格納壕の図面を地図上に落として記録保存し、地域の年配の方々に基地のことを聞き取り調査している。市民一人ひとりが残存する貴重な戦争遺跡のことを認識し、保存活用について取り組んでいかなければならないと考える。

昭和20年代後半の越浜南部(西牧山北麓)の写真

※『高知県郷土観光アルバム』(高知大学総合情報センター〈図書館〉中央館所蔵)の写真の越浜部分を拡大し、トリミングして引用掲載した。

写真の解像度が低く、明瞭ではないが、震洋の格納壕がぼんやりと見える。護岸工事前の当時の浜の景観がよく分かる。西牧山北面に砂礫浜が広がっていた。写真では鉄製のレールは見えないが、レールに乗せて震洋艇の出し入れをおこなっていた。